

平成29年度 広島文化学園子ども・子育て支援研究センター講演会

子どもの社会的な心の発達 ～子どもの道徳性の発達～

神戸大学大学院人間発達環境学研究科（国際人間科学部／発達科学部）准教授

講演者：林 創（はやし はじめ）

林 創氏のプロフィール

京都大学教育学部を卒業された後、京都大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）。その後、日本学術振興会特別研究員（DC1、PD）、岡山大学大学院教育学研究科（教育心理学講座）准教授を経て現職に至る。また、日本心理学会（機関誌等編集委員会委員）、日本教育心理学会（『教育心理学研究』編集委員会 常任編集委員）、日本発達心理学会（編集WG委員）等、オーソリティある多数の心理学会に所属するとともに、その中枢での役務を担っている。さらに、神戸大学附属中等教育学校、兵庫県立加古川東高等学校において高大連携委員会 教育研究アドバイザーや運営指導委員会委員、ベネッセ教育総合研究所アドバイザーなど、実際の教育現場・教材へのスーパーバイズを行う社会的活動にも積極的に取り組んでいる。



講演会の当日は、子どもの道徳性の発達に関する内容について、図や絵を使ったプレゼンテーションや動画を用いての実験の説明など、興味深い内容は勿論のこと、柔らかな口調で、聴衆の理解に寄り添った工夫のあるご講演に、広島文化学園大学の学生50名、小さなお子様をお連れの地域の方々や地域の保育士、幼稚園教員約30名、大学職員約20名のおよそ100名が熱心に聞き入った。ご講演では、子どもの道徳性に関する有名な理論の紹介もあったが、たいへん分かりやすく興味・関心を途絶えさせない様々な工夫のあるお話ぶりに、子育て真っただ中の保護者や現在、将来の保育者、教育者のそれぞれに多くの示唆を与えていただいた。

以下、ご講演の要旨を以下に記す。

1 子どもの発達はどうなっているのか？

道徳的判断の発達研究もピアジェに始まる。ピアジェの典型的な研究方法は、2つの似た話を子どもたちに聞かせるものである。Piaget (1932)の研究では、(a) 男の子がドアの後ろにコップがあるのを知らないままドアを開けてコップを15個割ってしまったという話と (b) 男の子が、高い戸棚の中のジャムをこっそり食べようとして、無理に取ろうとした際にコップを1個割ってしまったという話を比較させる。すると、7歳ごろまで (a) の方が悪いという判断が多く、その後は (b)

の方が悪いと判断するようになるのである。このように道徳的判断は「結果論的判断」（15個という被害の大きさ）から「動機論的判断」（盗み食いをしようとした）へと判断基準が変化する。コールバーグは、この考えを「ハインツのジレンマ」という葛藤状況を含む話を使って、より客観的に調べる方法を生み出した。コールバーグは、道徳的葛藤を引き起こす物語を読んだ子どもたちが、どのような判断基準で行動の「良し悪し」を決めるかに着目した。ハインツのジレンマとは「ハインツの奥さんが病気で死にかかっていた。

医者は『特別な薬を飲めば助かる』と診断した。ところが薬屋は、10倍もの値段をつけていた。ハインツは事情を話し、交渉したが断られた。困り果てたハインツは、愛する妻を救うために薬屋の倉庫に忍び込み、薬を盗んだ」というものである。この話の提示後に子どもたちは「ハインツは薬を盗むべきだったでしょうか?」「どうしてそう思うのですか?」等の質問をされる。コールバーグは、これらの質問を通じてハインツの行動は許されるのかどうかを子どもに判断させ、どのような理由付けをするかを考慮することで3水準(6段階)からなる道徳性の発達段階を評価する方法を考案している。はじめの水準は、行動の結果に方向づけられて、罰を避けて報酬を得ることを良いこととみなす(盗みをすれば罰を受けるから)「前慣習的水準」である。次に、習慣的な決め事に従う(盗みは犯罪で悪いことだ)「慣習的水準」となり、その後自ら定義した道徳的価値によって判断する(盗み悪いことだが、命の為に正当化できる)「脱慣習的水準」へと発達することになる。

ここまでをまとめると、幼児期から児童期に、言葉や論理的思考が大きく発達し、道徳的判断も変化を遂げる(学校教育でも、行為の善悪を「考えさせる」と言える。また道徳性は理性の賜物であることに疑念の余地がないように感じる。しかし本当にそうだろうか?)

2 人間の道徳的判断は理性があるものか?

近年の研究では、道徳的判断において直観が最初にあることが示唆されており、発達心理学でもその傾向は同様である。直観による道徳判断に関する実験では、トロッコ問題という課題への取り組みによる証明が有名である。トロッコ問題を3歳から5歳の幼児に実施し、大人と比較した研究がある。トロッコ問題(ストーリー1)とは「線路上に5人の人間がいる。その線路上をトロッコが猛スピードで走っており、そのままでは5人がひき殺されてしまう。5人を助ける唯一の方法は、あなたの目の前にある転轍機(ポイント)のレバーを引いてトロッコを支線に引き込むことである。しかしそうすると、支線上にいる1人の別の人間がひき殺されてしまう。」という内容を提示され、「あなたはポイントのレバーを引くか?」

との質問を受けるものである。さらにトロッコ問題は続き(ストーリー2)、「線路上に5人の人間がいる。その線路上をトロッコが猛スピードで走っており、このままでは5人がひき殺されてしまう。跨線橋の上にいるあなたの横には見知らぬ太った人がいる。その太った人を線路に突き落とせば、列車は確実に止まって5人は助かる。しかしそうすると、太った人が確実に死んでしまう。」との内容を提示され「あなたは横にいる太った人を突き落とすか?」と訊ねられる。トロッコ問題のストーリー1とストーリー2では、2つの問題は論理的には同一(5人を助けるために1人を犠牲にするか否か)である。したがってどちらにも同じ反応を示すはずである。ところが多くの人はストーリー1では「レバーを引く」(5人を助けるために1人を犠牲にする)と答えるが、ストーリー2では「太った人を突き落とさない」(5人を助けるために1人を犠牲にはしない)と答える。この研究では既に3歳の時点でシーン1ではレバーを引き、シーン2では太った人を突き落とさないという選択が多く、必ずしも論理的に一貫していない様子は大人と同様である。このことから道徳にかかわる直観的な判断は既に幼児期から大人と近い形で存在していると言える。

ここで2つの道徳的原理について触れておく。1つは帰結主義的道徳原理である。帰結主義的道徳原理では、自分のすることの「結果(帰結)」として生じる世界の状態に道徳性を求めるというものである。哲学者ベンサムによってまとめられたものが有名であるが、善悪は社会全体の効用や公益性によって決定するという考え方で、「最大多数の最大幸福」の言葉で代表される。もう一方は、定言的道徳原理である。定言的道徳原理とは、哲学で仮定や条件を設けず、無条件に主張することであり、結果(帰結)がどうあれ、ある種の絶対的な(無条件の)義務や権利の中に道徳性を求めるものである。この原理は、哲学者カントが提唱した義務論の内容として有名であり、一定のルール(例えば「5人を助けるためであっても、罪のない1人を殺すのは無条件に間違っている」といった道徳的ルール)に照らして、行為が正しいかどうかを判断するものである。これらの対照的な議論を踏まえてトロッコ問題をみると、トロッコ問題は、「帰結主義的原理(功利主義)に

基づくなら、5人を助けるために1人を犠牲にすべきであるが、定言的原理（義務論）に基づくなら、5人を助けるために1人を犠牲にすべきではない」となる。トロッコ問題のストーリー1と2の解答の結果の差異に見られたように、論理的に同じ問題に対して、状況によって回答が変わる。これらのことから道徳的判断は、必ずしも論理的（理性的）ではないのではないかとの疑念が生まれる。既に述べたように、トロッコ問題に関する発達のデータを見ると年少の頃から大人と似た反応を示すことが明らかになっている。これらの結果は、「感情」という無意識的なものが、道徳に関する直観的判断を支えている可能性を示唆する（「太った人を橋から突き落とす」シーンは感情的に極めてショッキング）。このことについて Hauser (2006) は、道徳性は本能であり、言葉と同様に生得的な面があるのかもしれないことを指摘している。Hamlinら (2007) の実験によると、山に登ろうとしている者を援助者が押して助けている状況と、逆に、山に登ろうとしている者を妨害者が押し戻す状況を提示したときに、6ヶ月の赤ちゃんは10カ月の赤ちゃんではどちらも同じ傾向を示し、どちらも援助者を好むとすることを明らかにした。この研究から分かったこととして、子どもの道徳性の芽生えは早い（赤ちゃんはポジティブな行動（援助）を好む）ということであった。また、Hamlin (2013) は、生後1年以内に、他者の向社会的／反社会的行為の評価ができることについても指摘している。さらに、Sloaneら (2012) は、道徳性に関する内容のうち「公平感の認識」について実験をしている。この実験では19ヶ月児を対象に、平等条件と不平等条件に分けて実験者が2つの人形にクッキーを与える内容が提示されている。平等条件では実験者が2つの人形それぞれに1つずつクッキーを与え、不平等条件では実験者が一方だけに2つクッキーを与えて、もう一方には与えない状況が提示された。これらの状況を19ヶ月児に提示した反応を分析した結果、19ヶ月児は不平等条件の方をより長く注視したことが明らかになっている。さらに21ヶ月児を対象とした実験では、左右にいる2人の人間の前で、実験者が「散らかったおもちゃを片付けたらステッカー（報酬）をあげる」と言う。「1人が作業する条件」では、2人のうち一方だけが散

らかったおもちゃを片付けたのに対して「両者が作業する条件」では2人とも散らかったおもちゃを片付けた。その後、どちらの条件でも実験者が2人に同じだけのステッカーを与えた。すると21ヶ月児は、1人が作業する条件の方より長く注視していることが明らかになった。これらの結果は、不平等条件や1人が作業する条件の方を不自然に感じたということを示しており、生後1歳を過ぎた頃には既に、物は平等に配分されるものであることを期待しているだけでなく、2人が何らかの作業した時には物は平等に配分されるが、1人だけが作業したときにはそうではないという認識を有することを示唆している。

3 理性的な道徳的判断の発達のカギ

幼児期から児童期にかけては、言語や思考が発達し、直観的な道徳性を超えた理性的な道徳的判断が必要となっていく時期である。入ってくる情報を保持、整理しながら不必要な情報への反応を抑制し、相手の心情に沿って思考することで理性的な判断が可能になるが、そのために更新や抑制を中心とした実行機能の向上が心の理論の発達に不可欠であると言える。

私たちは日々、衝動的に反応せず、次々と入ってくる新しい情報を整理し、順番を考えながら行動している。このように目標に向けて注意や行動をコントロールする能力のことを「実行機能」という。その捉え方は研究者によって違いがあるが、「抑制」「シフティング」「更新」の3つのプロセスが特に重要な要素であると言われている。なかでも「抑制」は、ある状況で優勢な行動や思考を抑えるプロセスとされている。さらに、道徳的判断において、理性的に考えていく上でカギになることの1つとして、心の理論の発達を踏まえることが大切である。心の理論とは、他者や自分の行動を「心の状態」（意図・知識・信念・好など）によって理解する体系（行動の背景に「こころ」が存在することを理解できる）のことである。

先に示したように、ピアジェの古典的研究によれば、子どもは7歳ごろまで結果に注意が向きやすく、その後、動機や意図といった内面の心の状態を元にした判断が変わることが知られている。心の理論研究が進むにつれて、言葉を使ったやり取りでもピアジェが報告した年齢よりももっと年



少の3～5歳頃から意図や動機といった心の状態に注目して、道徳的判断をすることが明らかになっている。Yuill (1984) は、3歳、5歳、7歳の幼児児童を対象に、「わざと」「わざとではない」の意図に着目した道徳的判断の実験を行っている。この結果、いずれの年齢でも「わざとやった」行為の方が悪いと感じることを示すことが明らかにされている。つまり、3～5歳頃から「わざとやる＝悪い」との関係を理解できていると言えるのである。日常を踏まえると、行為の善悪の判断については「意図（わざとか、わざとではないか）」のみならず、「知識状態（知っているか、知らないか）」も影響するが、両者の間には発達時期に違いがある。Hayashi (2010) は、知識状態（知っている／知らない）に基づいた行為の善悪の判断が、大人と同様の判断に近づくのは、8～9歳頃からであることを明らかにしている。

ここまでの研究をまとめると、まず3～5歳ごろから意図に基づく道徳的判断が可能になると言える。しかし、他者の心がわかるようになって、道徳的判断がすぐに大人に近づくわけではない。幼児は「知識状態」の手がかりを道徳的判断においてあまり使わないようである。さらに「知識状態」は予見可能性に直結することがわかる。幼児は、道徳的判断において、意図は考慮するが、予見可能性にはあまり注意を払わない傾向が示唆される。これらのことから、道徳的判断に関わる指導をする際には、教師は子どもに「わざとやったんでしょ」と注意すれば伝わりやすいものの、「誰のかが知っていてやったんでしょ」との注意の仕方は、なぜ悪いのが、子どもにすぐに分かりにくく、伝わりにくい可能性があると言える。

最後に、指導に際して押さえておくべきポイントは、幼児期は「心の理論」がまさに発達していく時期であるということである。他者の気持ちに気づかせるなど心の理論に関する内容について繰り返し指導することが大切であり、この過程が理性的な判断を育てるポイントになるのである。しかし、一方で他者がどう感じるかを意識しにくい子どももいることを理解しておくのも重要なポイントである。

Takagishiら (2010) は、「心の理論」課題に正答した子どもと誤答した子どもをそれぞれ含む4～6歳の二人をペアにし、実験者が一方の子どもに10個のキャンディーを渡し、もらった子どもは10個のキャンディーのうちいくつを相手にあげるかを決めるという課題を設定し「心の理論」と公正さの発達に関する実験をした。この結果、「心の理論」課題に正答した群は5個以上を相手に与えたのに対し、「心の理論」課題に誤答した群は4個以下を相手に与える傾向が見られるという結果を示した。このことから「心の理論」の発達が公正さの行動の鍵となる可能性を指摘することができる。同様の公平さに関する実験に「最後通牒ゲーム」というものがある。このゲームは「あなたが相手とペアで実験に参加する。実験者から相手に1,000円が渡され、相手はあなたにこのうちいくら渡すかを決める。その金額を提示されたあなたは、それを受け取るか、または拒否することができる。あなたが受け取りを拒否した場合、相手を受け取る金額も0円になると決められている」との状況を提示され、どうするのかの判断を求められるという実験である。合理的には相手の提示が1円でももらう方が得である。ところが相手の提示する額が4分の1以下になると80%の人が受け取りを拒否すると言われている。この結果からすると相手の提案に不公平さを感じると罰しようとする傾向があると指摘することができる。

これらの実験のまとめとなる指摘として、Haidt (2010) の「道徳は生得的な面があるとともに学習されるものでもある」との内容を挙げるができる。また、道徳は進化した一連の本能であり、同時に子どもは文化の中で生得的な本能を適用する方法を学習していくと言える。その基盤に心の理論と実行機能の発達が関わっており、ここに教育の重要性があると思われるのである。

4 心の理論と実行機能、そして道徳性は「遊び」を通じて高められる

トランプのババ抜き遊びは、心の理論の理解をしようとするゲームである。よく知られているように、このゲームは自分の手の内を隠すためにお互いにカードが見えない状況で行うゲームである。ポイントとしては、「①自分の手の内を隠すために、お互いにカードが見えない状況で行うことが前提（どのような角度と高さでカードを持てば相手に見えないかを考えながら行動を調整する）、②ババを引いた場合は、周囲の人に悟られないように平然を装うことが求められる、③相手にババを引かせるために、相手の裏の裏をかくように考える」などが挙げられる。子どもと関わった経験のある学生の感想からは「3～5歳の親戚の面倒を見る機会があったのですが、トランプをしてもゲームにならないことがありました」「ババ抜きは大変で、ババを引いた瞬間、笑い出してしまうたり、先に上がった子が他の子のカードを

覗き見て『…ちゃんが持ってる』と叫んでしまったり…」「トランプは子どもの遊びのように見えて、意外と高度なものを求められているのかなと思いました」などの記述が見られた。

このようなトランプのババ抜きという遊びを通じて、子どもは、ルール学習、心の理論（他者の見え）、行動のコントロール（実行機能）等の力を身につけていくことができると考えられる。

5 講演のまとめ

講演のまとめとして、まず道徳的判断は直観的から論理的へと進むと言える。次に、道徳性の芽生えは乳児期にあるが、うまく機能するには幼児期における心の理論と実行機能の発達が欠かせないことが指摘できる。ここに教育の大切さがある。最後に「遊び」を通じて、心の理論、実行機能、道徳性が育つ可能性があることを理解していることが必要であると言える。

（文責：大野呂 浩志）